

曲目解説

各校顧問の練りに練った選曲により、毎回充実したプログラムで注目を集めているジョイントコンサート。私が曲目解説を書くのも、早いもので8回目となりました。今回も新作、話題作が目白押しなので気合いを入れて解説を書きます。裏話なども交えるかも知れませんが、演奏と合わせてお楽しみに！

シャカタ、音楽によって世界は生まれた

SHAKATA Singing the World into Existence

ダナ・ウィルソン

Dana Wilson (b. 1946 : アメリカ)

ダナ・ウィルソンは、音楽理論や作曲などの博士号を取得し、現在はニューヨーク州内の大学で教鞭をとる傍ら、作曲活動を行なっている。吹奏楽の作品数は多くはないが、1988年作曲の「ピース・オブ・マインド」が、優れた吹奏楽作品に授与されるオストワルド賞に輝くなど、彼の作品は高く評価されている。今回演奏する「シャカタ」は1989年に作曲された。

オーストラリア先住民族アボリジニーの創造神話の中に「歌にはパワーがあり、歌を歌うことによって個人の生きるパワーが生まれ、それが集まって世界が創造された...」といった伝承があり(原文は相当難解とのこと)、そこからインスピレーションを得て作曲された作品。タイトルの「シャカタ」という言葉自体には具体的な意味はなく、言葉の響きから、パワーの象徴として使われているらしい。世に数ある吹奏楽曲の中でも、特に風変わりな曲の1つで、パワーの象徴である「シャカタ！」の掛け声が随所に現れ、圧倒的な勢いで迫り来る。このような作品は演奏される機会も少なく、今回の演奏にジョイントスタッフも注目している。

スクーティン・オン・ハードロック

Scootin' on Hardrock (Three Short Scat - Jazz Dances)

デイヴィッド・ホールジンガー

David R.Holsinger (b. 1945 : アメリカ)

ホールジンガーは教会の居住音楽家として活躍する傍ら、優れた吹奏楽曲を数多く手掛け、オストワルド賞も2度受賞(1982/1986)した実績を持つ。その作品は独特の雰囲気を持ったドラマティックな展開のものが多く、高く評価され、根強い人気を有する。ところが、今回演奏する作品はこれまでの作風とは異なり、力強い音楽ながら、何となくメランコリックな雰囲気も漂わせており、ホールジンガーの異色作として注目される。1999年に出版された。

タイトルの意味は「ハードロック通りを走り去る」となるが、これは作曲者の住んでいる街に実際にある、通りの名前に由来している。ハードロック通りは、かつて街の中心として賑わっていたが、現在では寂れてしまい、近道をする時にしか使われなくなってしまったとのこと。これを偲んで作曲された作品で「3つの短いスキヤット・ジャズ風の舞曲」というサブタイトルが付いており、ジャズ風の音楽で、速-緩-速の3部構成となっている。最後は通りが賑やかだったころをドライブの効いた音楽で描きながら、エンディングへと突き進む。

1年生合同バンド

今年は、参加7校から約100名の1年生が集まって合同バンドを結成しました。他校の部員に初めて出会い、最初のうちは戸惑いもありましたが、練習を重ねて行くうちに次第に打ち解けて、バンドの結束力も生まれて来たようです。今年は3曲演奏します。1年生のフレッシュな演奏をお聴き下さい。

2年生合同バンド

各校吹奏楽部でリーダー的役割を担う2年生約80名により合同バンドを結成しました。前回の演奏会で1年バンドとして演奏した仲間たちが再会して、より高い技術・表現力に挑戦しました。この1年間でどれだけ上達したか楽しみです。3曲演奏します。2年生の洗練された演奏にご期待下さい！

ザ・シンフォニック・デューク

The Symphonic Duke

トミー・ニューソン (編曲)

Arr. Tommy Newson Comp. Duke Ellington

1年生合同バンドのオープニングは、デューク・エリントン(1899-1974:アメリカ)の名曲集をお送りしよう。彼はジャズの巨匠として広く知られているが、1974年に他界するまでの50年間におよぶ音楽活動の中で、ジャズのみならず、組曲、交響曲、ミュージカル、バレエ、映画音楽、聖歌などの多岐に渡る作品を手掛け、その作曲数は実に3000曲を超えるとされる。まさに、20世紀の音楽界に偉大な足跡を残した音楽家であると言える。その旋律は親しみやすく、今なお世界中で演奏されている。今回演奏するのは、1920年代に創設され、その後の音楽界をリードしたデューク・エリントン楽団の名曲から「キャラバン」、「イン・ア・センチメンタル・ムード」、「サテン・ドール」、「ムード・インディゴ」、「A列車で行こう」の5曲メドレーである。いずれも有名な曲なので、いくつかはお分かりになるだろう。お楽しみに。

フランボワイアン～大地に広がる炎の花～

Flamboyant - Red Flames on the ground

八木澤教司

Satoshi Yagisawa (b. 1975 : 日本)

八木澤教司さんは市川市在住の若手作曲家で、管弦楽曲、吹奏楽曲、アンサンブル曲など幅広いジャンルの作品を手掛けている。2002年作曲の「吹奏楽のための音詩～輝きの海へ」は、これを委嘱した市川市立新浜小学校吹奏楽部によってコンクールで演奏され、同吹奏楽部は平成14年度の「文部科学大臣奨励賞」(全国1位)を受賞、八木澤作品が全国に広く知られるきっかけとなった。全国からの作曲依頼も多いが、市川市民ミュージカル「いちかわ・真夏の夜の夢」(2002年)の音楽担当を務めるなど、地元でも活躍している。地元在住ということで、この「ジョイントコンサート」参加各校との親交もあり、音楽面での良き相談役となっている。

今回演奏する「フランボワイアン」は、2003年新作で、中間部は八木澤作品の特徴であるコラール風の大変美しい旋律が現れる。タイトルは「火焰樹」とも呼ばれる炎を連想させる赤い花とのこと。詳細について作曲者のウェブページから転載許可を頂いたので紹介しよう。

今回は「炎」をテーマに作曲することが決定した。しかし、なかなか具体的な題材が見つからない…。事典類を利用して「炎」を連想させようと試みても上手くいかない。そんな切迫した心境のなか、気分転換にとインターネットで検索をしていたら「炎の花」という語句に出会い、すぐにその言葉の虜となった。調査を進めていると、炎の花とはアフリカの大地に見られるマダガスカル原産のフランボワイアン(火焰樹)であることが判った。多くの旅行者たちの日記には写真と共にフランボワイアンを見た時の深い感動の言葉が記されていた。12月のシーズン期には炎の海とも思えるほど豪快に咲き乱れるそうだ。私はこの花を実際に見てはいないが、想像を最大限に膨らませ、大地に広がる炎の花が持つ力強さと優美な様子を描くことにした。(八木澤教司)

交響詩「ローマの松」より

From The Pines of Rome Symphonic Poem

オットリーノ・レスピーギ

Ottorino Respighi (1879-1936 : イタリア)

レスピーギの作曲した3つの管弦楽曲「ローマの噴水」(1916)、「ローマの松」(1924)、「ローマの祭」(1928)は、合わせて「ローマ三部作」と呼ばれている。レスピーギは、管弦楽法の大家リムスキー・コルサコフ(1844-1908:ロシア)に学び、その影響を強く受けた。20世紀の作曲家たちが次々と新しい音楽表現に取り組む中で、楽器の響きと特徴を最大限に引き出し、色彩的に旋律と和声を鳴り響かせる管弦楽法にこだわり、数々の名曲を遺した作曲家である。

1924年作曲の交響詩「ローマの松」は、ローマの街を何世紀にも渡って見てきた松が語る、ローマの歴史と考えれば理解しやすい。4つの楽章から成り、演奏時間20分の大作であるが、今回は第2楽章「カタコンブの傍らの松」、第4楽章「アッピア街道の松」の2つの楽章を演奏する。カタコンブとは、キリスト教が迫害されていた時代に、教徒たちが作った古代の地下墓地のことで、奥の方から悲しげな聖歌が響いてくる。アッピア街道は古代ローマ軍の進軍道路で、ファンファーレとともに、次第に近づいてくるローマ軍の行進を表現している。

アルセナール

Arsenal

ヤン・ヴァンデルロースト

Jan Van der Roost (b. 1956 : ベルギー)

ヴァンデルローストは、母国のレマンズ音楽院で教授職を務め、後進の育成に務める傍ら、作曲活動を行っている。世界中の団体から作曲依頼あり、数年先まで予定が埋まっているほどで、吹奏楽界で最も人気がある作曲家の1人と言って良いだろう。ヴァンデルローストの作品は、2001年作曲の「シンフォニア・ハンガリカ」のような難度の高い交響曲から、中・高校生でも十分に演奏可能なものまで幅広くあり、高く評価されているものが多い。ちなみに優秀な指揮者としても知られ、日本にも何度か招かれて、客演指揮者を務めたこともある。

今回演奏する「アルセナール」は、ヴァンデルローストの母国にあるバンド、ベルギー・スポールヴェハルセナール吹奏楽団(ベルギー鉄道備蓄所吹奏楽団)の創立50周年を記念して1995年に作曲された。親しみやすいメロディを持った、格調高いコンサートマーチである。

交響曲第1番「ダンテの神曲」より"地獄篇"

ロバート・スミス

The Inferno (From Symphony No.1 "The Divine Comedy") Robert W.Smith (b. 1958 : アメリカ)

R.W.スミスは、特殊な打楽器や歌声などを使用した、演奏効果を駆使した興味深い作品を発表しており、90年代以降の吹奏楽界において注目されている作曲家である。スミス作品は比較的簡単な技法で書かれながらも「格好良く」聴こえるものが多く、根強い人気を有する。交響曲第1番「ダンテの神曲」は、ダンテ・アリギエリ(1265-1321:イタリア)の書き残した古典文学「神曲」からインスピレーションを得て作曲された。この物語は主人公のダンテが使者に案内されて、死後の世界を旅するといった内容で、そこで見たものが描かれ、最後は天国に至り幕を閉じる。原作は地獄篇、煉獄篇、天国編の全3篇から成るが、スミスは煉獄から天国に至る途中に「昇天」を追加し、全4楽章の交響曲とした。1998年完成。

1996年作曲の第1楽章「地獄篇」は、ダンテが使者に導かれて訪れた地獄を表現している。オーボエの悲哀に満ちたメロディに始まり、絶望の嵐が吹き荒れるような不気味な主題部が現れる。中間部は鎖で足枷された亡者の行列、鞭打たれる場面などリアルに描かれている。スミスの代表作の1つだが、ライブで聴く機会は案外少ない。今回の演奏をお聴き逃しなく。

サガ・キャンディダ

Saga Candida - 7 Impressions of a Witch Hunt

ベルト・アッペルモント

Bert Appermont (b. 1973 : ベルギー)

アッペルモントは、母国のレマンズ音楽院で学び、音楽教育、指揮法などの修士号を得て1998年に卒業した新進気鋭の若手作曲家である。ヴァンデルローストに作曲を師事し、その影響からドラマティックな展開を持つ作品が多く、人気も急上昇中である。これまでは中級者向きの作品が多い印象であったが、2003年新作の交響曲第1番「ギルガメッシュ」など、上級者向きの大作も書き始めている。さらなる活躍が期待される注目の作曲家と言えよう。

今回演奏する「サガ・キャンディダ」は2002年作曲。同年上演された全編、吹奏楽伴奏によるミュージカル「サタンの種」を再編集して作られたため、歌詞を付けても通用するほど美しいメロディを持つ。17世紀初頭、ヨーロッパに吹き荒れた魔女狩りの嵐は、当時、何の罪もない多くの人々が魔女であると告発され、犠牲になった。そんな魔女狩りの7つの情景が音楽で表現されている。詳しい作品解説が見つからず、細かなニュアンスは不明な点もあるのだが、情景を思い浮かべながら音楽に身を委ねていると、魔女の疑いで告発されるシーン、人々がヒソヒソと会話するシーンなど、実にリアルに浮かんで来る。いくつかの情景を経てやがて感動的なエンディングを迎える。まさにアッペルモントの傑作である。お楽しみに！。